

国際アートネットワークから地域文化政策へー阿蘇 Genesis 起源展への考察ー

三枝泰之（崇城大学）

1.はじめに（背景と目的）

現代に於いて美術が社会的に同時代的なメッセージを発言していくことは重要だと考える。2010 年自ら企画し、今後も展開を考えている『Genesis 起源展』をめぐってジャンルを横断した交流から地域と世界（同時代意識）を結ぶ発言を行いたい。

そもそも本展覧会に到る背景には、国際的なアートネットワークの参加団体である M.M.A.C.（Mixed Media Art Communication／福島県）への参加がある。この団体も発足の伏線となっている会津地方でのパフォーマンス・フェスティバルから数えると早くも 27 年あまりの歳月を経た。1997 年からは定着できる会場として、奥会津にある廃校を改良した施設があり外国人アーティストを招聘し、滞在型の制作、交流などが行われている。

2.研究の方法・調査

自らも各国アートフェスティバルへの参加を体験し、現地での美術展と社会的な発言との関係性などを肌で感じてきた。2002 年フランス／2003 年カナダ／2004 年ポーランド／2005 年ポーランド、上海／2006 年フランス／2008 年ドイツ、ポーランドなどである。

3.仮説と考察

筆者も度々参加している国内外のアートフェスティバルをベースに、自ら企画・開催してきた熊本に於けるアート展の変遷とその意義を振り返る。

01.2005 年 Passage to OLYMP「グローバリズムと自治について」

- ・インスタレーション制作に関する考察（デジタルテクノロジー／アウラ／メディアとしての人間）

02.2009 年 looking for NEW EARTH「未来派宣言から 100 年後」

- ・100 年前「イタリア未来派宣言」と現代社会の共時性

2 度にわたるメディア・アート展を通して見えて来た文化的な背景の差異性と同一性を、歴史的、同時代的な文脈から考察する。特に 2009 年の展覧会『looking for NEW EARTH（新しい地球を探して…。）』のテーマから自らの足元に阿蘇という世界最大級のカルデラの再発見につながった。この地をシンボルにドイツのキュレータ、ハロ・シュミット（ドイツ・ハノーバー「クンスト・ファウスト」館長）と共に 2010 年「火山・アート・人間」というテーマの元「Genesis-1 起源展」の開催に到った。

4.まとめ（展望）

本企画は単に現代アートを使った地域再生事業や観光資源開発を行うというものでなく、同時代的でグローバルな実践や他分野（地質学／農学／市民運動など）との交流を通して文化として認識されなかったモノやコトの発見へ繋げるものである。今回の多ジャンル交流パネルディスカッションに於けるキーワード、「火山・珪石・水晶・精神活動・文化発生など」から思想・哲学への展望もある。

一つのシンボリックなサイトから有機的な交流を経て、アートという一ジャンルの制作・発表だけのものでない「息づく文化」が見えてくるだろう。